慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一五〇三年の教会会議
Sub Title	Church council of 1503
Author	田辺, 三千広(Tanabe, Michihiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1983
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.53, No.2/3 (1983. 7) ,p.17(123)- 32(138)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830700-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一五〇三年の教会会議

田辺三千広

モスクワ府主教座は、一四三八年、コンスタンチノープル総主教座から独立し、それ以来、モスクワ大公をロシア教会の保護者とあおいだ。しかし、当時の教会は、完全に国家に従属していた訳ではなかった。教会の利害が犯されんとする時、これに激しい抵抗を示した。その一例が、一五〇三年の教会会議であった。この教会会議は、一六世紀初のロシア社会思想を反映する事件であっただけでなく、それ以後の国家と教会の関係という点からも重要な意義をもった。

この会議について、革命前の代表的歴史家B・O・クリュチェフスキーは、次のような見解を表明している。一五〇三年の教会会議で、ニル・ソルスキー（北方ロシアの隠修士）は、修道院の土地所有に反対して、モスクワ大公イヴァン三世に訴えた。修道院は、村をもつべきではなく、修道士は、人里離れた僧院（пустынь）で隠修士として暮し、自分の手仕事で生計を立てるべきだと。大公は、この問題を一五〇三年の教会会議に提起した。ヴォロコラムスキー修道院長ヨーシフ・ヴォロツキーは、これに反対し、以下のように主張した。もし、修道院が村をもっていなければ、尊敬に値する高潔な人間は出家しないだろう。そして、もし、尊敬に値する修道士がいなくなれば、府主教座、大主教座、主教座、教会のその他の権威ある座に就く人々をどこから得るのか。それゆえ、尊敬すべき高潔な修道士がいなくなれば、信仰も動揺するであろうと。教会会議は、ヨーシフの意見に同意し、修道院は村をもつべしとする説得力ある報告書をまとめ、大公に提出した。大公は、教会会議の意見をいれ、修道院領の世俗化をあきらめた。[1]

クリュチェフスキーのこの説は、革命以後も長く通説となってきた。[2] しかし、近年になって、ソヴィエト史家の間から批判が出されてきた。まず問題とされたのは、通説が典拠とした史料の信頼性についてである。それと共に、一五世紀末―一六世紀初の社会思想史の再検討から得られた成果により、「ネスチャジャーチェリ」（нестяжатели）[3]と、その指導者ニル・ソルスキーの教会会議での役割についても疑問が提出された。その上、最近発見され

た新史料により、通説批判は一層激しくなり、新しい事実もつけ加えられ、当教会会議に対する検討の幅が広げられた。本稿は、ソヴィエト研究者間の論争点を整理し、若干の私見を加えようとするものである。そこで、以下、二点に絞り、検討を加えたい。

(1) 通説が典拠としてきた史料の信頼性について。(2) ニル・ソルスキーの教会会議での役割についてである。

中世ロシア社会思想史に関し、ソヴィエト史学界で未解決になっている問題点の一つに、ヨーシフ派とネスチャジャーチェリの論争の開始時期に関する問題がある。ここでは、この問題に言及することはできないが、筆者は、これを両派に関する問題の中で最重要と考えている。当教会会議は、この問題を検討する上でも、欠くことのできない事件であり、今後の課題に対する一助としたい。

註

(1) В.О.Ключевский, Курс русской истории, ч.2. М.1906. 本稿では、次の版に依拠した。Курс русской истории, ч.2, Соч. т.2., М., 1957, стр.283-284.

(2) 例えば、革命後の歴史家では、И・У・ブドーヴニッを参照。И.У.Будовниц, Русская публицистики XVI века, М.-Л., 1947, стр.88-91.

(3) 「ネスチャジャーチェリ」は、修道院領を否定する修道士の一派をさす。「無所有派」等、いくつかの訳語があるが、定訳となっていないので、本稿では、原語のまま用いる。詳しくは、栗生沢猛夫氏の論文を参照。栗生沢猛夫、「〈нестяжатель〉研究とその問題点」史学雑誌、八三編一号、四一―四三頁。

I

一五〇三年の教会会議に関する通説に対し、最初に批判を加えたのが、Г・Н・モイセーエヴァである。彼女によると、通説の典拠となったのが、十六世紀半の史料、「キリル修道院の僧とヨーシフ修道院の僧との不和に関する書簡」[1]（以下、「不和に関する書簡」と略す）と、「作者不明のヨーシフ・ヴォロツキー伝」[2]（以下、「ヨーシフ伝」と略す）であるとし、二つの史料に再検討を加えている。[3]

モイセーエヴァは、次のように指摘している。「不和に関する書簡」の記述と、「ヨーシフ伝」やネスチャジャーチェリの一人、ヴァシアン・パトリケーエフによる「ヨーシフ・ヴォロツキーとの論争」[4]の記述との間には重要な差異があると。[5]「不和に関する書簡」では、次のように述べられている。「そして、教会会議で妾を囲っている司祭と輔祭についての問題の決議がなされた後、長老ニルが語り始めた。修道院は村をもたず、修道士は人里離れた僧院で生活し、自分の手仕事で生計を立てた」[6]と。これに対し、「ヨーシフ・ヴォロツキーとの論争」では、「……全ロシアの大公イヴァン・ヴァシリェヴィチは、妾を囲っている司祭のことで聖職者とニルとヨーシフにモスクワに来るように命じ、さらに、聖なる教会と修道院がもっている村を没収したいと言った」[7]と述べられている。「ヨーシフ伝」では、「ツァーリの命令により、府主教と高位聖職者が、次の話を知るために首都に集まった。修道院が村や畑をもつことは好ましいことではない」[8]と述べられている。

モイセーエヴァは、上述の記述の間の重要な差異を指摘してい

る。「誰が教会領の問題を提起したのか、すなわち、イヴァン三世に代表される政府であるのか、ニルに代表される教会人であるのかである」。そこで、彼女は、「不和に関する書簡」の作者の政治思想上の立場を再検討する必要を説いている。[9] この点について、次のように考えている。「不和に関する書簡」は、ヨーシフ派の一人、ニル・ポレフの話にもとづいて書かれ、ヨーシフ派の思想を反映している。当時、ロシア教会の首長である府主教座にヨーシフ派のダニイル（一五二一―一五三九）とマカーリー（一五四二―一五六八）が就いていた。その時に、イヴァン三世とヨーシフの間の教会領世俗化をめぐる不和を暴露することは都合が悪かった。そこで、この対立を覆い隠すために、一五〇三年の教会会議では、イヴァン三世のいかなるイニシアチブもなしに、ネスチャジャーチェリとヨーシフ派の間で起った論争として取扱われた。[10] 以上、モイセーエヴァは、「不和に関する書簡」を偏向的史料であるとした。[11]

次いで、彼女は、通説の典拠となった第二の作品、「ヨーシフ伝」に言及している。「ヨーシフ伝」は、「不和に関する書簡」と異り、一五〇三年の教会会議が、ツァーリの命令で召集されたと正しく述べられている。しかし、その話の全体的傾向は、「不和に関する書簡」と同じであり、この史料も偏向的である。[12] さらに続けている。史料の作者は、修道院領世俗化計画のイニシアチブが、大公にではなく、大公に大きな影響力をもったネスチャジャーチェリに属したと語っている。それは、「大公と教会代表者との間に当時存在した対立を覆い隠そうとし、大公へのネスチャジャーチェリの影響力を強調する」ためである。作者は、同じ意図から、ヨーシフの教会会議での発言を省いた。[13] 以上が、「ヨーシフ伝」に対するモイセーエヴァの見解である。

彼女は、「不和に関する書簡」も、「ヨーシフ伝」も共に、ネスチャジャーチェリに敵意をもつヨーシフ派によって書かれた偏向的史料であることを指摘している。それらの史料が一五〇三年の教会会議の性格付けにとって不適当であるとしている。そして、教会会議におけるネスチャジャーチェリの役割を否定している。[14]

一方、H・A・カザコーヴァは、モイセーエヴァの見解に反対し、次のように述べている。「一五〇三年の教会会議におけるネスチャジャーチェリの発言について、通説を再検討するための史料学的根拠は何もない」。[15]

カザコーヴァのモイセーエヴァ批判は、次の二点に対してなされている。まず、各史料間の記述の矛盾について。第二に、大公とヨーシフ派の対立を覆い隠すため、ヨーシフ派がネスチャジャーチェリの役割をでっちあげたという説に対してである。

カザコーヴァは、これら一連の史料――「不和に関する書簡」、「ヨーシフ伝」、「会議報告」[16]、「ヨーシフ・ヴォロツキーとの論争」――の中に、いかなる矛盾もないことが指摘できるとしている。ある一つの史料に存在しない記述が、他の史料に存在するとしても不思議はない。それぞれの史料が、一五〇三年の教会会議の活動の異った場面を述べているのだから、[17] すなわち、上述の一連の史料の作者の叙述しようとする目的が異っている。そのため、ある一つの史料に存在する記述が他の史料に存在しないのである。

それ故、それらの史料の記述が矛盾しているとは言えない。このように考えるカザコーヴァは、さらに続けている。「不和に関する書簡」の作者の目的は、ヨーシフ派とネスチャジャーチェリとの間の不和について語ることであった。つまり、教会会議の経過を描くことではなかった。だから。教会会議召集の事情についても、また、その結果についても何も語っていないのは当然である。逆に、ヴァシアン・パトリケーエフの「ヨーシフ・ヴォロツキーとの論争」は、大公のイニシアチブによる教会会議の召集という最初の場面を描いている。また、「会議報告」は、教会会議の終りの部分を伝えている。これら二つの史料は、教会会議とそこでの論争の経過を全く伝えていない。だから、これらの史料の中に、ニルやヨーシフの発言に関する記述がないのは当然である。[18] 以上が、カザコーヴァによるモイセーエヴァ批判の第一の点である。

第二の批判は、ヨーシフ派による「でっちあげ」説に対してなされている。教会会議におけるネスチャジャーチェリの発言や役割に関する記述が、大公とヨーシフの間の対立を覆い隠すために、ヨーシフ派によってでっちあげられたという議論に対してである。これについて、カザコーヴァは、モイセーエヴァの議論が根拠に乏しいものであるとしている。「不和に関する書簡」と「ヨーシフ伝」の記述を比べ、次のような疑問を述べている。一五〇三年の教会会議でのニルの発言の事実が、教会領の問題に対する大公の態度、大公とヨーシフ派の対立等を覆い隠すためのでっちあげであるならば、次のような疑問が出てくる。「ヨーシフ派の一人である『不和に関する書簡』の作者は、この対立を隠そうとしたとしよう。それでは、なぜ、同じヨーシフ派の一人である『ヨーシフ伝』の作者は、この対立を隠さなかったのか。それだけでなく、大公と、ヨーシフ派の敵対者ネスチャジャーチェリとの間の緊密な関係を強調することとさえしたのか」。[19] ヨーシフ派は、別段、大公との不和を隠そうとはしていない。これが第二の批判である。

以上のように、史料の信頼性をめぐり、モイセーエヴァが指摘した二点に対し、カザコーヴァが批判を加えた。前者が、偏向的史料であり、信頼することができないとして退けた史料を、後者は、逆に、有効な史料としている。これらの史料を信頼できないとして退ける前者は、一五〇三年の教会会議におけるニルとネスチャジャーチェリの役割を認めない。これに対し、後者は、ニルの教会会議での役割を認め、次のように述べている。「教会会議で、ニルが世俗化の提案をした。しかし、教会会議は、大公の命令で召集された。それ故、ニルの発言は、大公の同意をえていたか、あるいは、大公から促されたという仮説が自然である」と。さらに、彼女は、ニルが、大公の教会領世俗化政策のイデオローグとなったとまで述べている。[20]

「不和に関する書簡」と「ヨーシフ伝」の史料として信頼性をめぐって二つの見解が対立している。その結果、一五〇三年の教会会議の性格付けについても、全く対立したままであるのは当然である。そこで、以下、二つの史料の信頼性について、さらに、それと関連し、誰が教会会議で世俗化の提案をしたのかという点について検討を加えたい。

モイセーエヴァが言うように、二つの史料の記述は、ヨーシフ派によりでっちあげられたものであり、信頼するに足りない史料であるのか。一五〇三年の教会会議に関する史料の一つ、「会議報告」についてみてみよう。「会議報告」は、教会の土地所有権に関する教会会議の見解を述べた大公への報告と考えられる。「教会と聖職者と修道院の土地について教会会議が開かれた。全ロシアの府主教シモンと聖なる教会会議は、まず、書記（дьяк）のレヴァシュと共に書簡を全ロシアの大公イヴァン・ヴァシリェヴィチに送った」という書き出しで始まる。続いて、「君主よ、なんじの父、全ロシアの府主教シモンと大主教、主教と全ての聖なる会議は次のことを言う……」と述べられている。そして、教会領、修道院領の伝統的所有と神聖不可侵についての論拠付けがなされている。ビザンツ皇帝の命令や、公会議（全地公会）の決定、さらに、ロシアの大公ヴラヂーミル一世とヤロスラフの時代のことなどを引用している。この書簡を補うため、第二の書簡が出されている。そこでは、教会に土地を与え、神聖不可侵を保証したロシア諸公の行動が詳しく説かれている。そして、次の句で終っている。「教会の全ての所有物は、神の所有物であり、神によって任され、指名され、与えられたものである。それ故、売ったり譲渡したりしてはならない。いかなる時も、奪われたり、侵害されたりすべきでなく、神聖にして賞賛に価するように管理、維持されねばならない。」[21]

「会議報告」は、教会領、修道院領の神聖不可侵を説いている。大公の世俗化計画に対する教会側からの反対の表明である。これは、教会領の問題に関し、大公と教会の激しい対立を反映する史料である。カザコーヴァによると、「会議報告」には、長い版と短い版の二版が存在している。時期的に後のものと考えられる短い版は、十六世紀五〇年代に編纂された。イヴァン四世治下に開かれた教会会議、いわゆる、ストグラフ会議（一五五一年）での修道院の土地所有権に関する問題の議論との関係で作られた。[22] つまり、「会議報告」の短い版は、教会領、修道院領の神聖不可侵の典拠の一つとして利用された。一五五一年、ヨーシフ派の府主教マカーリーのもとで開かれたストグラフ会議に利用された。すなわち、ヨーシフ派の府主教のもとで、かつての大公と教会の激しい対立を想起させる「会議報告」が利用されたのである。「会議報告」が、大公に対して激しい抵抗を示した史料であること、それがヨーシフ派の府主教のもとで再び修道院領擁護のために利用されたこと、以上のことから、ヨーシフ派にとっては、教会領、修道院領の問題で、大公とのかつての不和を覆い隠さなければならない理由は全くない。従って、同じ頃に書かれたとされる「不和に関する書簡」や「ヨーシフ伝」[23]も、大公とヨーシフ派のかつての対立を隠さねばならない必要はない。ヨーシフ派の指導者ヨーシフの発言が、「ヨーシフ伝」の中に見られないからといって、大公との対立を隠すためであったと結論することはできない。「不和に関する書簡」についても同じことが言える。

「不和に関する書簡」について考えてみよう。他の一連の史料と異り、教会会議がイヴァン三世によって召集されたという記述がないからといって、でっちあげと見ることはできない。「不和に

関する書簡」の作者の目的は、カザコーヴァが指摘したように、ネスチャジャーチェリとヨーシフ派の不和について語ることであった。「何故、キリル修道院の長老達はヨーシフ修道院の長老達を好まないのかを私は尋ねられた。そこで、私は、彼らの間の不和について簡単に話をしよう」[24]。この書き出しに始まり、次に、不和になった原因として次の四つを挙げている。㈠　一五〇三年の教会会議でのニルの修道院領否定の発言と、それに対するヨーシフの反論。㈡　ニルの死後、ヴァシアン・パトリケーエフとヨーシフの修道院領所有の賛否をめぐっての論争。㈢　懺悔をしたノヴゴロドの異端者に対する態度をめぐってのヴァシアンとヨーシフの対立。㈣　ヴァシアンの主張により、キリル修道院から追放されたヨーシフ派の修道士ニル・ポレフとディオニーシー・ズヴェニゴロツキーに関する事件。これら四つの事件を述べた後、作者は、ニル・ポレフの話にもとづき、四番目の不和、つまり、二人のヨーシフ派の修道士のキリル修道院からの追放について詳しく語っている。さらに、その後で、ヴァシアンが大公の怒りをかい、ヨーシフ修道院へ追放され、そこで死んだことが述べられている[25]。

「不和に関する書簡」の作者が挙げている四つの不和の中で、作者が述べようとした当面の問題は、㈣の不和である。「これが、最後の不和であり、今日に至っている」[26]。しかも、この事件については、「そして、長老ニル・ポレフが、これについて我々に語った」[27]とあるように、事件の当事者から直接に証言を得た唯一の不和である。この不和の事件が、この作品の中心テーマであると言える。先の三つの不和の話は、作者と同時代の不和の事件に至る歴史的叙述と考えられる。特に、両派の指導者であったニルとヨーシフの一五〇三年の教会会議での対立を述べることは、両派の以後の対立をより鮮明とする上で効果があったろう。二人の対立は、ネスチャジャーチェリとヨーシフ派の決定的不和に至る導入としての役割を果している。そのことから、ニルとヨーシフの対立を幾分誇張して描く必要があったと考えられる。教会会議での大公とヨーシフの対立を隠すために、ニルとヨーシフの対立に置き替えられたというモイセーエヴァの説には賛成できない。ネスチャジャーチェリとヨーシフ派の不和をより明瞭にするため、両派の代表者の対立を誇張して描いたと考える方が適当なのではないか。ニルの発言は、他の史料から、「修道院は村をもつべきではない」[28]という言葉のみ確認されている。一方、ヨーシフの発言はどこにもない。以上のことから、「不和に関する書簡」に述べられているような論争が実際にあったのか否かは分らない。しかし、これをイヴァン三世とヨーシフの対立を隠すためのヨーシフ派によるでっちあげと見るのは適当でない。「不和に関する書簡」の内容には、不正確な点もあるが[29]、全面的に退ける必要はない。

それでは、通説やカザコーヴァが言うように、教会会議でニルが世俗化の提案をしたのであろうか。この点については、先に述べたように、モイセーエヴァにより、一連の史料の間の矛盾が指摘された。その後、Ю・К・ベグノフによって教会会議に言及している新しい史料「他の話」[30]が発見された。その史料にもとづき、ベグノフは、一五〇三年の教会会議におけるネスチャジャーチェ

リの役割を否定している。「他の話」は、次のように書いている。「大公イヴァン・ヴァシリェヴィチは、府主教と全主教と全修道院のもつ村をとりあげ、全てを併合することを望んでいる」[31]と。すなわち、これは、教会領、修道院領の全面的な世俗化を意味した。ベグノフは、次のように述べている。「ネスチャジャーチェリは、このような規模での世俗化問題を提起しなかった。彼らは、道徳的、倫理的観点から問題を提起したにすぎなかった。従って、一五〇三年の教会会議への世俗化問題の提起は、ネスチャジャーチェリからではなく、大公自身からなされた」[32]。ベグノフは、カザコーヴァの見解——教会会議への世俗化問題の提起は、ニルによってなされた——を否定した。

この点について、カザコーヴァは、後の著書で自説を撤回している[33]。しかし、ネスチャジャーチェリの教会会議における役割を大きく評価し、通説に従っていることに変わりはない。

註

(1) 《Письмо о нелюбках иноков кириллова и иосифова монастырей》 в кн.: Послания Иосифа Волоцкого, М.-Л., 1959, стр. 366-369.

(2) 《Житие преп. Иосифа Волоколамского, составленное неизвестным》, Чтения в обществе истории и древностей российских при московском университете, 1903, кн. 3.

(3) Г. Н. Моисеева, Валаамская беседа—памятник русской публицистики середины XVI в., М.-Л., 1958, стр. 20-30.〔以下、Г. Н. Моисеева, Валаамская беседа. と略〕: ее же, О датировке 《Собрания некоего старца》 Вассиана Патрикеева, Труды Отдела Древнерусской Литературы〔以下、ТОДРЛ と略〕т. XV, 1958, стр. 349-350.

(4) 《Прение с Иосифом Волоцким》, в кн.: Н. А. Казакова, Вассиан Патрикеев и его сочинения, М.-Л., 1960〔以下、Н. А. Казакова, Вассиан Патрикеев と略〕стр. 275-281.

(5) Г. Н. Моисеева, Валаамская беседа, стр. 23.

(6) Послания Иосифа Волоцкого, стр. 367.

(7) Н. А. Казакова, Вассиан Патрикеев, стр. 279.

(8) 《Житие преп. Иосифа Волоколамского》 стр. 37.

(9) Г. Н. Моисеева, Валаамская беседа, стр. 23

(10) Там же, стр. 24-27.

(11) А・А・ジミーンも、「不和に関する書簡」に対し偏向的史料との批判を加えている。彼は、教会会議でのヨーシフの発言について疑問をもった。「ヨーシフが修道院領保護の発言をしたという史料はない」。さらに、「ヨーシフが、当時、まだ修道院領に関する見解を作成していなかった」とし、「ヨーシフの発言は、「不和に関する書簡」の作者が、ヨーシフの口を借りて、自分の見解を述べたものである」と述べている。(А. А. Зимин, Об участии Иосифа Волоцкого в соборе 1503 г., в кн.: Послания Иосифа Волоцкого, стр. 373-374: его же, О политической доктрине Иосифа Волоцкого, ТОДРЛ, т. 9, 1953, стр. 170-171.)。Я・С・ルリエーも、この史料の信頼性について批判的である。(Я. С. Лурье, Идеологическая борьба в русской публицистике конца XV-начала XVI века〔以下、Я. С. Лурье, Идеологическая борьба と略〕, М.-Л., 1960, стр. 413-416.)

(12) Г. Н. Моисеева, Балаамская беседа, стр. 29.

(13) Там же, стр. 29-30.

(14) Г. Н. Моисеева, О датировке《Собрания некоего старца》Вассиана Патрикеева, стр. 361.

(15) Н. А. Казакова, Вассиан Патрикеев, стр. 30.

(16) 《Соборный ответ 1503г.》в кн.: Послания Иосифа Волоцкого, стр. 322-329.

(17) Н. А. Казакова, Вассиан Патрикеев, стр. 28.

(18) Там же, стр. 28. Н・А・カザコーヴァは、誰が教会領世俗化の問題を提起したのかという点に、ここでは触れていない。しかし、この点については、明らかに史料間に矛盾がある。

(19) Там же, стр. 29-30.

(20) Там же, стр. 31. ニルが大公のイデオロークとなったとするカザコーヴァの説は、次節で検討を加える。

(21) Послания Иосифа Волоцкого, стр. 322-325.「会議報告」は、二つの書簡から成っている。初めの書簡では、次のことが述べられている。コンスタンチヌス帝とそれに続くビザンツ皇帝の時代から、教会と修道院は土地をもってきた。公会議（全地公会）の教父達は、教会財産の不可侵を述べている。ロシアでも、大公ヴラディーミル一世とヤロスラフの時代から、教会が土地をもってきた。さらに続けて、教会と修道院の土地の神聖不可侵を述べた文献や、「村をもっていた」東方やロシアの聖人からの引用などが補足されている。

本文中、最後に引用した第二の書簡の句は、キリスト教の伝統的な考え方であるが、ここで、初めて、モスクワ大公に対し確認されたということで、大きな意義をもつ。

(22) Н. А. Казакова, Очерки по истории русской общественной мысли первая треть XVI века.〔以下、Н. А. Казакова, Очерки と略〕Л., 1970, стр. 69.

(23)「不和に関する書簡」は、十六世紀三〇年代に、「ヨーシフ伝」は、十六世紀半ばに書かれた。（Н. А. Казакова, Очерки, стр. 73, 75.）

(24) Послания Иосифа Волоцкого, стр. 366.

(25) Там же, стр. 366-369.

(26) Там же, стр. 368.

(27) Там же, стр. 368.

(28) Ю. К. Бегунов,《Слово иное》—новонайденное произведение русской публицистики XVI в. о борьбе Ивана III с землевладением церкви〔以下、Ю. К. Бегунов,《Слово иное》と略〕ТОДРЛ, т. 20, 1964, стр. 351.

(29)「不和に関する書簡」の内容の不正確な点は、ジミーンによって指摘された。その一つは、この作品では、教会会議に修道士パイシー・ヤロスラヴォフが出席したと述べられている点である。彼は、一五〇一年十二月二十三日に死んでいる。（А. А. Зимин, Об участии Иосифа Волоцкого. стр. 374）

(30)《Слово иное》, в статье: Ю. К. Бегунов,《Слово иное》стр. 351-352.

(31) Ю. К. Бегунов,《Слово иное》стр. 351.

(32) Там же, стр. 355.

(33) Н. А. Казакова, Очерки, стр. 84.

II

以上、史料の信頼性について検討を加えてきた。また、そこから出てきた問題、すなわち、誰が、教会会議に教会領、修道院領

の世俗化を提起したのかという問題にも検討を加えた。次に、史料の信頼性に関連した第二の問題に検討を加える。すなわち、ネスチャジャーチェリは、教会会議で重要な役割を果したのか否かである。

モイセーエヴァは、次のように考えている。ニルが、一五〇三年の教会会議に出席したことは、一連の史料によって確認されている。しかし、教会会議に出席したからといって、教会領の問題で特別な役割を演じたとは言えない。なぜなら、ニルは、著名な教会活動家である。一五〇三年の教会会議では、教会領と修道院領の運命に関する問題が提起されたのだから、彼が教会会議に出席しているのは当然である。[1] さらに、ニルは、自分の作品の中で、修道院領への反対をどこにも直接的に語っていない。[2] 以上のことから、モイセーエヴァは、一五〇三年の教会会議でのニルの積極的な役割を認めていない。

しかし、ニルが、ただ教会会議に出席していただけであったとは言えない。先に引用した「不和に関する書簡」の「修道院は村をもたなかった」というニルの発言は、「他の話」によって確認されている。「りっぱな生活で知られたベローゼルの修道士ニルが、大公に近づき、カメンスキーの修道士デニスと共に大公に語った。『修道士は村をもつべきではない』と」。[3] ニルのこの発言は、教会会議で何らかの役割が演じられたことを示すものである。

モイセーエヴァは、さらに、ニルが教会会議に出席しているのは当然のことであったと述べている。しかし、彼女自身も認めているように、ニルは修道士の内面的自己完成の方法に情熱をもっていた。すなわち、ニルは、修道士の誓いの厳格な遂行による精神的苦行を理想とした。[4] そのため、彼は、首都から遠く離れた北方ロシアの小僧院（СКИТ）で苦行の生活を送っていた。その彼が、たとえ教会領と修道院領の運命に関する重大な問題が提起されることを知ったとしても、自ら進んで教会会議に出席するとは考えられない。ヴァシアン・パトリケーエフは、「ヨーシフ・ヴォロツキーとの論争」の中で次のように書いている。「……大公イヴァン・ヴァシリェヴィチは、聖職者とニルとヨーシフにモスクワに来るように命じた」。[5] この記述から、ニルは大公によって特別に教会会議に招かれたと考えられる。ニルは、大公の特別の招きで教会会議に参加し、そこで、「修道士は村をもつべきではない」と発言したといえる。

次に、ニルのこの発言が、教会会議でどのような役割を果したのかを考えてみる必要がある。

カザコーヴァは、ニルが大公の教会領世俗化政策のイデオロークとなったことを指摘し、次のように説明している。「中世の宗教的世界観のもとでは、相当な宗教的論拠を与えることなく教会領世俗化の計画を推し進めることは不可能である。それ故、異端との決別[6]の後、大公がネスチャジャーチェリに向ったことは当然であった」。[7] すなわち、彼女は、大公イヴァン三世がニルを教会領世俗化のための宗教的論拠を与えるイデオロークにしようとしたとしている。さらに、ニルについても、大公への接近を認めている。「ニルにとって、教会会議での修道院領反対の発言は、彼の教えの内容と傾向からみて当然の行動である」。それ故、「ニルが大

公の命令で教会会議への参加のためモスクワにやって来た時、彼は、すぐに修道院領世俗化問題を提起する役割を理解した[8]」。こうして、カザコーヴァは、ニルと大公との接近を認めている。

以上のカザコーヴァの見解から、次の三点が問題となる。㈠大公イヴァン三世は、自らの政策遂行のためにニルをイデオロークとしようとしたのか。㈡一方、ニルは、進んで大公のイデオロークとしのて役割を負ったのか。㈢ニルの教会会議での発言は、大公の政策に宗教的論拠を与えるものであったのか。

Я・C・ルリエーは、カザコーヴァの見解に対して批判的である。㈠と㈡の点について、ルリエーは次のように述べている。「ニルが大公の非公式の代表者であると考えられる史料は全く存在しない。ニルと大公との間の関係については全く知られていない[9]」。彼は、大公がニルをイデオロークとしたことも、ニルが大公のイデオロークとなろうとしたことも否定している。しかし、㈠について言えば、先に述べたように、世俗を捨て、孤独の生活を求めるニルが、教会会議に出席したということは、当然のことであったとは考えられない。むしろ、大公の特別の招きによったと考えられる。そのことから、大公がニルを教会領世俗化に宗教的論拠を与えるイデオロークとしようとしたことは充分考えられる。

他方、㈡についてはどうか。すなわち、ニルは、カザコーヴァの言うように、教会会議に出席した時、大公のイデオロークとなることを意識したのか。ルリエーが指摘するように、これに関する史料は全くない。間接的には、ニルの修道生活に対する態度が、

この問題に否定的な答を与える。ニルは、モスクワから遠く離れた人里寂しい草庵に住み、内面的自己完成をめざし、政治にはほとんど関心を示さなかったからである。この問題に答を出す前に、㈢について検討してみよう。なぜなら、ニルの発言が、大公の政策に宗教的論拠を与えるものであったか否かは、ニルの態度に大きくかかわっていたからである。

ルリエーは、カザコーヴァの見解に対して、次のように述べている。「ニルの見解は、教会領世俗化の宗教的論拠には全く適さない[10]」。すなわち、「ニルは、自分の著作の中で、どこにも修道院の財産とその所有について直接語っていない。ニルの修道院領否定は、修道士の内面的自己完成という彼の理論から出てくる帰結である。このような明確でない、間接的な議論は、国家的規模での世俗化の論拠とはなりえない[11]」。

ニルの発言、「修道士は村をもつべきでない」というのは史料から明らかである。これは、修道院領についてのみ言及されたことで、教会領については何も語られていない[12]。一連の史料から明らかなように、イヴァン三世が教会会議で提起したのは、会教会領、修道院領の世俗化の問題である。それ故、ニルの発言は、全教会領世俗化への論拠を与えるものではない。たとえ、カザコーヴァの言うように、ニルの教えの論理的帰結が修道院領の否定であったとしても、それは教会領まで否定するものとはなりえない。

㈢について別の点から考えてみよう。先に検討された「会議報告」は、全教会会議から大公イヴァン三世に宛てられたものである。仮に、ニルの発言が、大公の教会領世俗化計画に宗教的論拠

を与えるものであり、教会会議で大きな役割を果したとしてみよう。それならば、何故、全教会会議の名前で、大公を説得するための「会議報告」を三度も出すことができたのか。[13]「会議報告」の内容は、前節で見たように、ニルの発言と全く対立するものである。その内容は、教会領だけでなく、修道院領に対しても世俗化反対を表明するものである。コンスタンチヌス帝以来、「聖職者と修道院は、町や郷や村や農地をもってきた」。[14] ニルの発言が、大きな役割を果したとするなら、当然、この「会議報告」の中にその反映がみられねばならない。ところが、これは、修道院領さえも擁護しているのである。「会議報告」の内容は、ニルの発言が教会会議にそれ程大きな影響を与えなかったことを示している。

ニルの発言は、宗教的論拠付けには役立たなかった。それでは、なぜ、ニルはそのような発言をしたのか。ベグノフにより発見された史料「他の話」をみてみよう。ニルとデニスが修道院領に反対を述べたという記述に続いて、次のように書かれている。「トヴェーリの貴族ヴァシーリー・ボリソフもこれ（ニルとデニスの意見）に賛成した。そして、大公の子供達である大公ヴァシーリーとドミトリー・ウグレツキー公は、彼らの父の意見に賛成した。そして、大公の側近達（дьяки введеные）も大公に賛成して次のように言った。『修道士は村をもつべきではない』と。ゲオルギー公はこれについて何も語らなかった」。[15]

以上の記述から次のことが分る。挙げられている発言者の中で、ニルとデニスだけが教会関係者であり、他は俗人である。また、ニルとデニスに続いて俗人が同意見を述べている。すなわち、二人の発言が、俗人の修道院領に対する意見を引き出す役割を果している。ニルの発言が、イヴァン三世の世俗化提案にいく分か宗教的色彩を与えている。それでは、ニルは、自ら進んでそのような発言を行ったのだろうか。そうであるなら、なぜ、ニルは修道院領にのみ言及したのだろうか。イヴァン三世が提起した問題は、全教会領の世俗化であった。ニルの発言は、イヴァン三世の問いに対する答にはなっていない。ニルは、大公から発言を求められ、ただ、自分の考えを率直に語ったにすぎないと考えるのが自然である。ニルは、自分から進んで大公のイデオロークになろうとしたとは考えられない。

以上、三点について検討してきた。教会会議におけるニルの果した役割について次のことが言える。大公イヴァン三世は、教会領世俗化のための宗教的論拠を必要とした。彼は、そのイデオロークとしてニルを考え、彼を教会会議に招いた。大公から発言を求められたニルは、「修道士は村をもつべきでない」と、率直に自分の考えを述べた。しかし、それは、大公が期待したような全教会領世俗化への宗教的論拠を与えるものではなかった。さらに、それは、教会会議そのものに対しても、大きな影響力を示さなかったといえる。

従って、カザコーヴァのように、ニルの役割を過大に評価することはできない。しかし、また、モイセーエヴァやルリエーのように全く否定してしまうこともできない。

註

(1) Г. Н. Моисеева, Валаамская беседа, стр. 28–29.

(2) Там же, стр. 28.
(3) Ю. К. Бегунов, 《Слово иное》 стр. 351.
(4) Г. Н. Моисеева, Валаамская беседа, стр. 28.
(5) Н. А. Казакова, Вассиан Патрикеев, стр. 279.
(6) 当時問題となっていたノヴゴロド＝モスクワ異端のこと。この時までにイヴァン三世は、異端に属していたとされる義理の娘エレーナや側近の一人であったフョードル・クリーツィンらを遠ざけた。
(7) Н. А. Казакова, Вассиан Патрикеев, стр. 31.
(8) Там же, стр. 31-32.
(9) Я. С. Лурье, Идеологическая борьба, стр. 416.
(10) Там же, стр. 416.
(11) Там же, стр. 415.
(12) ニルの発言が、教会領の世俗化に言及したものではなく、修道院領にのみ限られたものであったということは、カザコーヴァによっても述べられている。(Н. А. Казакова, Вассиан Патрикеев о секуляризации церковных земель, ТОДРЛ, т. 15, 1959, стр. 157)
(13) 教会会議は、最初、府主教の書記官レヴァシュに、「会議報告」中の第一の書簡を届けさせた。次に、府主教シモン自身と全教会会議のメンバーが、大公のところに行き、第一の書簡と同様の見解を述べた。そして、さらに、三度目に、同レヴァシュに第二の書簡をもたせた。
(14) Послания Иосифа Волоцкого, стр. 321.
(15) Ю. К. Бегунов, 《Слово иное》, стр. 351.

結び

以上、一五〇三年の教会会議に関するソヴィエト史学界の争点の内、二点について若干の検討を加えてきた。これまでのソヴィエト史家による一連の論争によってこの会議に関する全問題が解明された訳ではない。しかし、通説に対し、大きな修正が加えられ、当教会会議に対する認識も深められてきたことは疑いない。通説では、修道院領の争いは、教会内の相対立するグループ、すなわち、ネスチャジャーチェリとヨーシフ派の間で争われたように説かれている。しかし、この争いは、実は、大公と教会との争いであったことが明らかにされた。また、大公イヴァン三世の目的は、修道院領の世俗化だけでなく、全教会領の世俗化であったことも明らかにされた。

一五〇三年の教会会議で、教会側が勝利を得、大公は、世俗化案を撤回した。むすびにかえて、今後の検討課題としてのイヴァン三世の撤回について若干の私見を述べたい。

教会会議は、大公に対して特別の書簡、「会議報告」を送り、教会領世俗化反対を訴えた。大公を説得することは容易ではなかったが、結局、彼は世俗化をあきらめ、その考えを撤回する。その原因について検討するための史料はほとんどない。しかし、前節で検討したニルの教会会議での役割と全く無関係であったとはいえない。

大公が世俗化をあきらめた原因について、B・O・クリュチェフスキーは、次のように述べている。「教会会議は、議論の対象となっていなかった主教領を修道院領と結びつけ、その解決を困

難にするため、全教会領の問題にそれを広げた」。そして、「高位聖職者は、それを全教会領の収奪といういまわしい問題に変えた」[1]。しかし、前節で述べられたように、イヴァン三世の目的は最初から、全教会領の没収であった。教会側が、修道院領世俗化の問題を全教会領の世俗化の問題にすりかえたとする史料はない。

一方、モイセーエヴァとカザコーヴァは次のように説明している。大公は、教会内の支配的なグループと争い、彼らの支持を失うことを恐れた。そこで、大公は、教会会議の見解に同意せざるをえなかった、という説明である[2]。しかし、この説明では不充分である。モイセーエヴァは、大公が世俗化計画を提案した理由として、次のように述べている。「中央集権国家形成の支えとなる士族階層（дворянство）の維持のため、土地を必要とし、教会領、修道院領にそれらを求めた[3]。カザコーヴァは、この理由と共に、教会から経済的基盤を奪い、国家への従属をめざしたことを付け加えている[4]。士族階層の維持、教会の国家への従属、これらは、中央集権化を進めるイヴァン三世にとって重要政策であった。この重要政策を果すために世俗化案を提起したとするなら、その案の撤回には、余程の理由がなければならない。ただ教会の支配的グループとの争いを避けたという説明だけでは不充分である。なぜなら、世俗化案は、教会側にとっても重要な問題であり、それが教会側から激しい抵抗を受けることは当然であったから。教会側との争いを避けて世俗化を遂行することは、ほとんど不可能である。

ベグノフは、「他の話」にもとづき、次のように述べている。

「一五〇三年七月二十八日、イヴァン三世は、突然、病に陥り、トロイツェ＝セルギエヴォ修道院との争いに敗れた。そのことが[5]、教会会議での修道院領に関する論争を止めさせる上で決定的な意味をもった[6]」。

「他の話」では、前半は、一五〇三年の教会会議について書かれている。後半は、イレムナ村をめぐり、セルギー修道院と大公との争いについて書かれている。争いの原因は、イレムナ村にある大公領と修道院領との境界をセルギー修道院の修道士が侵犯しているという住民から大公への密告であった。大公は、セルギー修道院に対して罰金を課した。さらに、修道院がもっている村に関する全ての証書を大公に差し出すように命じた[7]。セルギー修道院長セラピオンは、大公のこの処置に従った。そして、長老達にそれらをもって行くように言い、自分は、他の修道士と共に、聖セルギーの棺[8]の前に立っていた。その夜、神が大公に裁きを下した。大公は、手足がきかなくなり、目が見えなくなった。そこで、大公は、セラピオンに許しを請うた[9]。以上が、「他の話」の後半である。

ベグノフの見解は、次のようである。住民の密告により、大公は、従来考えていた教会領世俗化を教会会議に提起する決心をした。そして、大公は、修道院長セラピオンに、セルギー修道院のもつ村を譲渡するように要求した。セラピオンは、この要求に反対し、府主教シモンに働きかけた。結局、シモンをはじめとする教会会議は、「会議報告」を出し、大公に反対を表明した。第二の書簡をもった府主教の書記官レヴァシュが、大公のもとに使わさ

れた。しかし、結局、大公の予想外の病、それに続くセルギー修道院との争いの敗北、これらが、教会会議での修道院領に関する論争を止めさせた。[10] 以上が、ベグノフの見解である。

このベグノフの見解にはいくつか疑問点がある。まず、日付けである。ベグノフは、イヴァン三世の予想外の病を、一五〇三年七月二十八日としている。七月二十八日に、イヴァン三世は、手足が働かなくなり、目が見えなくなった。そこで、セラピオンに許しを請い、修道院領の世俗化をあきらめ、教会会議でその考えを撤回した。もし、そうであるなら、この世俗化案撤回後に、他の教会改革案が決議されたことになる。聖職への叙任料の廃止の決議が八月六日に、[11] さらに、妾を囲っている聖職者の聖務遂行禁止と、修道士と女子修道士が同じ修道院に住むことの禁止の決議が九月十二日になされている。[12] ベグノフの説に従えば、この決議の順序は、「不和に関する書簡」や「ヨーシフ・ヴォロツキーとの論争」などの情報と矛盾する。「不和に関する書簡」では、次のように述べられている。「そして、教会会議で、妾を囲っている司祭と輔祭について決議がなされた後、長老ニルが語り始めた……」。[13] 「ヨーシフ・ヴォロツキーとの論争」では、次のようになっている。「……全ロシアの大公イヴァン・ヴァシリェヴィチは、妾を囲っている司祭のことで聖職者とニルとヨーシフにモスクワに来るように命じた。そして、さらに、次のように言った。聖なる教会と修道院がもっている村を没収したいと」。[14] これら二つの記述から、妾を囲っている司祭と輔祭の聖務遂行禁止の決議が行なわれた後で、世俗化の提案がされたことが分る。つまり、世俗化の問題が論じられたのは、七月ではなく、九月以降であったと考えられる。

二番目の疑問は、大公の予想外の病と、それに続くセルギー修道院との争いによる敗北についてである。ベグノフは、これらが、教会会議での教会領世俗化案の撤回の原因となったとしている。しかし、ベグノフ自身が述べているように、大公の予想外の病とセラピオンへの嘆願は、一種の修道院伝説である。それらは、奇蹟によって説明されている。[15] すなわち、たとえ君主であろうと神聖な神の財産を犯そうとする者には、神の裁きが下される。この話は、教会財産の侵害者への教訓のために作られたものである。この教訓を述べるために挙げられた奇蹟を、教会会議での世俗化案撤回の原因とすることは無理ではないか。これは、単なる教訓であり、実際に起ったかどうかは疑わしい。上述の話が、大公の考えを変えさせた原因であったとは思えない。

また、ベグノフの説では、「会議報告」の意義が充分評価されていない。第二の書簡が大公のもとに送られた。しかし、教会会議での論争を止めさせたのは、その書簡ではない。大公の突然の病とセルギー修道院との争いの敗北を中止させたことになっている。しかし、「会議報告」は、第一節で述べたように、後日も修道院領世俗化政策に反対する典拠の一つとして使われた。「会議報告」は、イヴァン三世の考えを変えさせることになんら役立たなかったのか。そうであるなら、後の大公やツァーリの政策に反対する典拠の一つとしてどれ程有効であったろうか。それ程期待のできないものである。「会議報告」が、後の世俗化論争に登場する

という事実は、時の大公イヴァン三世が、それを全く無視していたわけではないことを示している。イヴァン三世が世俗化をあきらめる原因の一つとして、「会議報告」があったことを考慮すべきである。

それでは、「会議報告」は、どのような役割を果したのか。カザコーヴァが先に指摘したように、当時、相当な宗教的論拠を与えることなく教会領世俗化の計画を推し進めることは不可能であった。それ故、大公は、修道院領に反対を唱えるニルを特別に教会会議に招き、宗教的論拠付けのためのイデオロークとしようとした。また、前節での「他の話」からの引用にあったように、俗人が修道院領世俗化に賛成意見を述べる前にニルとデニスにその口火を切らせている。すなわち、教会関係者の側から世俗化賛成の意見が出されたことを印象づけようとしている。ところが、大公の期待に反し、ニルの発言は、教会領世俗化あ論拠とはならなかった。ニルの意見に対する多くの支持者も教会内からは出てこなかった。逆に、教会会議の大多数は、「会議報告」において、教会財産の神聖不可侵を証明した。「会議報告」は、全教会の名前でイヴァン三世に提出され、世俗化案の撤回を迫った。つまり、この「会議報告」は、全教会人が世俗化案に反対するという大公への意志表明の意義があったと考えられる。世俗化は、大公にとって重要政策の一つであり、容易には撤回できなかったが、これ以上世俗化を主張すれば、全教会勢力と対立関係に陥ることは充分予想できた。そこで、止むを得ず、世俗化をあきらめた。イヴァン三世は、世俗化の考えが教会内から出され、支持者が現れるという形にしたかった。ところが、その思惑ははずれ、全教会の反対を受けるに至った。以上の事情から、結局、イヴァン三世は、強く主張していた世俗化をあきらめざるをえなかったのではないだろうか。

以上の考えには、今のところ充分な裏付けがない。それは、一五〇三年の教会会議に関する史料が不足していることにもよる。今後の課題となろう。

註

(1) В.О. Ключевский, Курс русской истории, ч. 2, стр. 284.
(2) Г.Н. Моисеева, Валаамская беседа, стр. 33. Н.А. Казакова, Вассиан Патрикеев, стр. 35.
(3) Г.Н. Моисеева, Валаамская беседа, стр, 21. 32.
(4) Н.А. Казакова, Очерки, стр. 82.
(5) 後述するように、イレムナ村をめぐり、イヴァン三世とセルギー修道院が争い、大公は、修道院長セラピオンに許しを請い、村の譲渡をあきらめた。
(6) Ю.К. Бегунов, 《Слово иное》, стр. 360.
(7) セルギー修道院のもっている村を大公が没収することを意味する。
(8) 聖セルギー(一三九二年没)、トロイツェ＝セルギエヴォ修道院の創設者。
(9) Ю.К. Бегунов, 《Слово иное》, стр. 352.
(10) Там же, стр. 360.
(11) Акты, собранные въ библиотекахъ и архивахъ российской империи археографическою экспедициею〔以下、ААЭ.

と略〕 т. 1, СПб. 1836, No. 382. 聖職に就く時、叙任を受ける主教に金銭が支払われていた。この会議でそれが廃止された。

(12) ААЭ. т. 1, No. 383.

(13) Послания Иосифа Волоцкого, стр. 367.

(14) Н. А. Казакова, Вассиан Патрикеев, стр. 279.

(15) Ю. К. Бегунов, 《Слово иное》, стр. 358–359, 363.